

一人で時代を前に進めた天才として織田信長は筆頭と考えられます。

当時、戦国大名は自分の領地を守ることで精一杯でしたが、唯一「天下布武」と称し、当時の強大な既得権益を破壊し、日本を統一することを明確に意識し、そのための戦略を持っていた人でした。

既得権益の代表として、戦国時代、宗教勢力は加賀の大名を滅ぼすほど、並みの大名以上に力と資金、権力を持っていました。特に石山本願寺、延暦寺は強大な権力を持ち、延暦寺は当時日本で一番資金をもった組織でした。

権力の源の資金は、当時、大名が米などの農産物の税徴収、金銀の採掘、地税の徴収などを資金としていたのに対し、宗教勢力は特筆すべきこととして、独占して物を売る（市）、独占して物を造る（座）の許認可権をもっており、膨大な利益を労せずして得ることができていました。

その潤沢な資金で常時使える武装集団を大量に抱えることによつて、農閑期しか兵を使用できない並の大名より強い軍隊を持ち、修学を忘れ、酒色におぼれていたことが多く記録されています。（多聞院日記等）

このような巨大な宗教勢力をおかしいと思い、無力化しようとする勇気のある大名は信長以外にいませんでした。

信長は、交易を制することで日本を統一ことができることを知っていました。

1) まず、堺・大津・草津の主要な交易港を抑え、鉄砲の大量生産地である国友村を抑えました。堺は鉄砲の大量生産地でもあり、弾薬に使用する硝石の唯一の交易港でもありました。これにより、多額の資金を得ることが可能になり、鉄砲を大量に手に入れることを容易にし、敵対する大名に弾薬を与えなくすることができるようになりました。

2) 当時お城は防御のために山に造られていましたが、大量に人を集められる平地に作り、多額の資金をもとに俸禄を払い城の周りに家臣を住ませることで兵農分離をおこない、いつでも兵隊を動かすことができるようにし、守りを固め、その周囲に大量の町民を住ませ、日本で始めて城下町をつくりました。

3) 守りを固めた時点で、関所の通行税をとることをやめ、物価を高くしていた独占既得権益の座、市を廃止し、だれでも物を自由に作れ、売ることができるようになったため（楽市楽座）、物価も安くなり信長の領地、城下町には人が沢山集まり、さらに膨大な資金を得ることができるようになりました。

4) これらの膨大な資金を背景にさらに軍備を增強し、寺社の武装解除を成し遂げ既得権益を廃し通常の宗教勢力とし、戦国大名を次々と臣下にしていきました。秀吉、家康と国家統一の意思は引き継がれ、当時の世界ではまれな平和な町民のための江戸時代となり、爆発的な西洋化を起こす明治への準備が始まりました。

西洋では、宗教が社会に強い影響を与えている時代を中世と定義しますが、信長は一人で中世から近世の扉を開いてくれた天才でした。

